

最終夜 今宵、酔鏡にて

「珍しいですね。高橋さんが事務所においでになるやなんて」

「わしも改まって本名で呼ばれるとなんやこそばゆい感じやな。いつも通りユウヤンで構へんで」

ユウヤンは居心地悪そうにソファの上で身じろぎした。言われた男は『職場ではそういうわけにもいきませんから』と笑った。窓の外に小さく大坂城が見えている。大阪城公園から離れた立地であることを考え合わせればここがビルの高層にあることが窺える。

「刑事裁判に強い弁護士ということでしたけど……」

男はテーブルに置かれた湯飲みを取りながら本題に入った。

「ああ、起きたことは純粹に事故やと思うてる。けど、その後いらん偽装しよったから死体遺棄罪になると思うねん」

ユウヤンは先月知人の身に起こった事件を詳しく説明した。

「なんせ、三つの子がいてるねん。母親と離しとうないし、大きくなってから後ろ指さされるような経歴も残しとうない」

無茶な頼みかもしれないが、そういった事件に強い腕の良い弁護士を紹介してほしいとユウヤンは頭を下げた。

「私が直接担当しても良えけど、うってつけが一人おりますわ」

男は携帯電話を取り出すとしばらく言葉を取り交わしていたがやがて満足げに電話を切った。どうやら話がまとまったようだ。

「いやほんま、恩に切ります」

立ち上がると姿勢を正してユウやんは腰を折った。

「ちよっ、やめて下さい。ユウやんらしいもない」

口を滑らせたことに気付いて男は慌てて手で口を覆った。

「仕事さしてもろただけです。それに……、あの白澤商事と揉めた時、ユウやんがいてへんかったらこの事務所はなくなっていました。ちっとは恩返しさせて下さい」

照れを隠すように男は早口で言った。

※

「工藤先生」

テキストを脇に抱えて廊下を歩くセンセは前に行く数学科の教授を呼び止めた。その声に足を止めた工藤教授はセンセの方を振り返って『はい』と応え^いた。少し時間をもらえないかとセンセは言って階下のカフェテリアに誘った。

「ずい分昔の話になります……」

センセはそう断ってから用件を切り出した。二人の前のテーブルには白いコーヒーカップが湯気を立てている。

「震災の時の話なんです。あの頃、うちは学生の操作ミスで卒論のデータが全部消えて大騒ぎになっておりました。で、急遽データを集計し直さないといけなくなりましたが人手が足りなくて、先生の研究室からも応援を出して頂いてましたよね」

工藤教授は記憶をまさぐるように目を細めながらコーヒーを啜った。

「ええ、センター試験の前後でしたな。幸いうちは卒論も一段落して落ち着いていましたから、助手を一人そちらの応援に回したと記憶しています」

言って、工藤教授は忘れていた歯痛を思い出したように渋い顔になった。

「本当に申し訳ないことをしてしまった。徹夜で仕事をしてもらった挙げ句、建物の倒壊に巻き込まれて……」

センセも言葉を詰まらせる。で？と工藤教授は話を持ち出した理由を尋ねた。

「あ、ああ。その……、薄情な男と思われても仕方ありませんが、あの時亡くなった助手の方の名前がうる覚えなのです」

言われた工藤教授は遠い目になって言った。

「優秀な男でした。何より生まれついで科学者だった」

太い溜息を吐いてから工藤教授はその助手の名を告げた。

「結城徹ゆきとほろ。あれから十二年経つが未だに彼を越える助手に恵まれることはありません」

「確か、ご家族がいらっしやいましたよね」

「ええ、博士課程の時に学生結婚して、震災の年にはまだ小学生の娘さんがいたはずだ」

「そのお嬢さんの名前はわかりませんか？」

センセの言葉に工藤教授の目付きが用心深げに細められた。

「さあ、そこまでは覚えていません。というより震災の直後に引越しをされて消息がわからないのです。それより吉岡先生。どうして今更そんな昔のことを調べておられるのですか」

工藤教授の口調はあからさまに不機嫌な調子を帯びていた。

「いや、最近そのお嬢さんが実は身近におられるかもしれないことを知ったのです。もしかして、工藤先生の研究室で事務をされている……」

「吉岡先生、見え透いていますよ」

工藤教授はセンセに顔を近付けると小声ながら刺すような口調で囁いた。

「大方、白澤家から依頼を受けて探りを入れに来られたのでしょう？」

「あの、何の話ですか？」

「とぼけなくても良い。だが、たとえ総理大臣が来ようとも僕は彼女を渡すつもりはありませんから」

言い捨てる工藤教授は席を立った。テーブルに残った二つのコーヒーカップ

プを眺めながらセンセは戸惑うばかりだった。

※

「しのぶちゃん、ちよつとええかな」

呼ばれたしのぶは何か考え事をしているのか顔すら上げない。

「しのぶちゃん」

耳元で言われてしのぶは、椅子の上で撥ねて、危うく引つ繰り返りそうになった。

「あ、はい。御崎先輩。なんででしょう？」

資料を抱えた御崎先輩の方に向き直りながら、些かハスキーな疲れた声を出す。

「この表の数字、合ってる？なんやおかしいねんけど」

しのぶは指された箇所を凝視していたが、しばらくすると『あれ？』と言い、程なく『ええっ』と叫んだ。

「ゼロが二個足りません。どうしてでしょう？」

「そらこつちが聞きたいわ。佳代ちゃん、ちよつと待ってそれ計算し直しや」
御崎先輩は聞こえよがしの大声を上げる。しのぶは思わず首を竦めた。開けっ広げな性格の好美先輩と違って、御崎先輩はちよつと粘着質なところがあつてしのぶは苦手だった。

「すみません。すぐ直します」

「頼むで。今週、三回目やん。ただでさえ今日は好美ちゃんが風邪で休んでるんやし」

言いながらしのぶの隣の席を見遣る。好美先輩の机は相変わらず大量の資料が乱雑に積まれ、今にも雪崩を起こしそうだ。

「もつとも風邪かどうか怪しいけど。昨日、飲みに行ったんやて？」

「いえ、私は用事があったので先輩は一人で行かれたみたいですよ」

小言の出鼻を挫かれたのが忌ま忌ましかったのか、舌打ち代わりに『修正急いでや』と言い捨てて先輩は席に戻って行った。

※

「わかっていると思うけどこっちは助っ人の松崎さん入れて五人しかおらへん」
相沢は腕組みをしてチームメイトを一渡り見渡した。端に立っているバリキも頷いた。ロツカールームは静まり返りキャプテンの相沢の声だけが響く。バリキは試合前のこの空気が好きだった。

「相手は柳沼や。わかってるな」

男達の顔が心なしが強張ったように見えた。

「けど、相沢さん。俺、柳沼のことは噂で聞くだけで実際に当たったことはいねん。そんなに酷いんか」

「あいつらの試合見てるとよそのチームのラフプレーが可愛らしい見えてきますわ」

バリキの隣に立つ男が苦い顔をして言った。

「あいつら、試合中はボールより審判の視線の方をよく見てるんちゃうかと思いました。それくらい巧妙に仕掛けて来よるんです。特にバスケはオフフェンス有利で、まずファウル取られることがないですよ。向こうがオフフェンスに回ったときは恐怖でした。木下も八木も向こうのオフフェンスでやられたんです」
相沢のチームは先月柳沼と試合をした。その試合で主力選手二人が手痛い負傷をして復帰の目処は立っていない。その原因が執拗なラフプレーにあったというのだ。

「柳沼は中学バスケの頃からある意味有名なやつでしたけど、それは勝つためやったら手段を選ばんことで有名なんです。あいつがああ柳沼商事の御曹司やっつて知ってます？」

「なんとなく聞いたことはあるな」

大手の総合商社だ。

「連盟にもあちこち息がかかってるらしくて、良うない噂を聞きます。とにかく手に入れたいものはどんな手使っても……」
「おい小田、それくらいにしとけ」

相沢がじれたように言って黙らせた。

「とにかく、怪我には気をつけてくれ。一人でもリタイヤしたら今日の試合はアウトや」

相沢の檄げきに全員が『はい』と声を揃えた。

※

「電話でも申した通り。うちも手いっぱい、これ以上子供さんを受け入れられる状況やないんです」

真冬にも関わらず小太りの園長先生はしきりにハンカチで汗を吹いている。隣の部屋から小さな子供のけたたましい笑い声が響いた。

「いや、そないに長期やないんです。三カ月。それがあかんかったら二カ月でも一カ月でも構いません。ともかく、今日、明日にでも昼間預かってくれる園を探してるんですわ。助けると思うてお願いします」

珍しくスーツを着込んだユウやんが頭を下げる。

「いや、頭を下げられても困りますわ」

「：：園長先生、腹割って話しましょうか。最初お願いした時は預かれますいうお返事頂きました。それが、次の日になって生徒がいっぱいであかんと言われた。誰かは知らんが、こちらに連絡してきたんちやいます？その子の親は刑事事件で警察の厄介になってるて」

園長先生は俯いて黙り込んだ。ハンカチを握りしめた手に力が入っている。「いや責めてるんちゃいますよ。当然の対応ですわ。いくら子供には罪はないいうても、ここの園児の親御さんにしたら気色悪いわ。わかりました。ここの入園は諦めます」

ユウヤンは言って人懐っこく笑った。顔を上げた園長先生もつられて頬を緩める。

「その代わり、来週から園長先生の遠縁の子をこの部屋で預かって下さい。三歳の男の子やけど、手がかからん大人しい子です」

「ちよっ、それは……」

「両親が急な出張で三月までロンドンに行かなあかんようになつた言うてくれれば構いません。この部屋から出さんかったら他の子と接触することもないでしょ」

「しかし……」

「いや実は噂の出元はもうわかってるんです。これ以上妙な噂を撒かんように手は打ちました。あ、もちろん預かって頂いたお礼は相応にさしてもらいますよ。それから、もう一つ条件付けさしてもらいましょ」

ユウヤンが再び笑う。が、今度の笑いはすこぶる人の悪い笑みだった。

「来年の三月からやったら保育士の口を探してる人を紹介できますよ。こちら

開所時間拡張してから保育士の実働、週五十時間近いんちゃいますか？」

「それは……いや、誰に聞いたんですか」

「一般論ですて」

ユウやんがまた笑った。

「けど、もしそうやとしても追加の保育士の確保は今日日難しいし、いろいろ大変やろなて思うたんですわ。けどこのままやったら、保育士さんから厭味や愚痴言われるだけではすまんようになるんちゃいますか？」

言われた園長先生はじっと考え込んだ。

数分後、園長室の戸を後ろ手に閉めるユウやんは鼻歌でも歌い出しそんな顔をしていた。

※

「どうしたの？敬一くん、いきなりそんな昔の話を聞きたがるなんて」

センスは家に帰るなり妻に大学の同期生のことでちよつと教えてほしいと切り出した。

「だいたいさあ、今日は呑んでくると思ったから夕飯の支度何もしてないじゃん。普通、メールとかくれないかなあ」

妻はなかなか本題に入ってくれそうにない。

「いや、それは置いておいて。大したものはいりませんから」

栄養がどうのという妻を宥めつつセンセは本題を切り出した。

「数学科の結城先生の結婚相手って、千秋さんの同期ではなかったですか？」

「ん？白澤涼子ちゃん？うん、そうだよ」

センセの妻の千秋さんは事も無げに頷いた。

「学生結婚だったそうですね」

「敬一くんがそれ言うかなあ。自分の研究室の女子学生口説いて奥さんにしたくせに」

千秋さんがけらけら笑う。『うちはうちです』——しれっとセンセは言った。

「だいたいさあ、あの二人が結婚したのってあたし達の影響なんだよ。周りからいろいろ言われたのをもともせず、あたし達が結婚しちゃったから、あの二人も駆け落ちに踏み切ったんじゃない」

『知らなかった』とセンセが漏らすと、有名な話よ——と、千秋さんが笑った。つくづく教授なんでもものは学生同士のことについては蚊帳の外だとセンセは思った。

「で、何が知りたいの？」

「その、お二人にはお子さんがいたそうなのですが、何か覚えてますか？」

「ええと、そういういえば女の子が一人いたはずだなあ。ただ、あたしも涼子ちゃんとは研究室が分かれちゃったからそれほど親しくなかったのよ。それにほら、

あの子達が結婚したのって二十一年前でしょ。あたしは……」

言って千秋さんはお腹の前で半円を描くジェスチャーをする。それを見てセンセは『ああ』と言った。

「お腹の中に恵めぐみがいたもん。もう学校どころじゃなくなつたなあ」
女子学生の頃と変わらないはじけるような笑い声を立てる妻を見て、センセはわけもなくどきまぎした。

「ま、同期に訊いて回ったらわかると思うよ。ちよっと待ってて」

言いながら既に携帯電話を握っている。思い立ったらすぐで、行動が素早いところもあの頃のままだとセンセは思った。

※

「そういえば八月に面白い数学の問題にまつわる話を聞きました。それを小学校一年生の女の子が解いたんだそうです」

ふと顔を上げてしのぶが振り返りながら言った。しのぶの背後に立っていた工藤教授は何か言い掛けて止めた。まもなく午後九時。二人以外に残っている者はなく、部屋はしんとしている。しのぶは山下から聞いた正直村と嘘つき村の話をした。

「有名な問題だね。応用問題を一つ出そう。質問を一つしてどちらの道が正直村に続いているか知るためには君はなんと質問する？」

しのぶはちよつと考えてすぐに答えた。

「一方の村を指差して『あなたが住んでいるのはこちらの村ですか？』と訊きます。私が指したのが正直村なら正直村の人も嘘つき村の人も『はい』と答えます。私が指したのが嘘つき村なら『いいえ』と答えます」

正誤の判定を待つようにしのぶは工藤教授をまっすぐ見詰めた。

「正解だ。だが、答えを出すのが少し性急過ぎる。他にもつと良い解答がないかを模索すべきだ。たとえば、もっとシンプルに『あなたの村はどちらですか？』と訊けば、正直村の人も嘘つき村の人も正直村を指すんじゃないかな」

工藤教授に言われてしのぶはちよつと首を傾げたがすぐに答えた。

「いえ、その質問だと嘘つき村の人に『どちらでもない』という答えをさせる隙を作ります。この問題のポイントは、質問に対する嘘の答えが複数できないようにすることです。ですから、正しい答えの反対が嘘の答えであることすなわち、『はい』か『いいえ』の二択でしか答えられない質問をすることが一番シンプルになると思います」

しのぶの答えを聞いて工藤教授は初めて笑った。

「問題の本質が理解できているようだね。大変結構」

壁掛け時計が九時を告げた。教授は腕時計を見て『もうこんな時間か』と慌てた。

「君といると時間を忘れていけない」

照れ臭そうに笑うと工藤教授はしのぶの肩に手を載せて『帰ろうか』と言った。しのぶは黙って頷くとまだ名残惜しそうに椅子の上で身じろぎしていたが、ようやく思い切ったように立ち上がった。

「あ」

二人の声が重なる。立ちくらみを起こしたようによろけて、しのぶは教授の胸に倒れ込んだ。そのまましのぶはじっとしていた。

「私……先生しか頼る人がいないんです」

やおら、しのぶは胸に顔をうずめたままぐもった声で言う。

「僕なんかで本当に君を支えられるのかい」

彼女の肩をしっかりと抱きながら教授は訊いた。『はい』——しのぶは顔を上げて教授をまっすぐに見上げて言った。

※

「ほんま半端やなかった」

バリキはソファにぐったりもたれかかりながら言った。テーブルの上のアイスコーヒーは一瞬で空になっている。

試合は辛勝したのだが――。

「なんや普通の試合の三倍くらい疲れたわ。何が悲しうてバスケの試合でキッ

クやパンチのガードばっかりせなあかんねん」

「だから言うたやん」

向かいの相沢が笑いながら言った。試合を落さずに済んだ札にとバリキを喫茶室に誘ったのだ。と、相沢の顔から笑いが消えた。バリキが振り返ると柳沼とチームメイトが店に入ってくる場所だった。

バリキは目顔で出ようと合図を送ったが、柳沼が目敏く見付けて近付いてきた。

「松崎さん、今日はありがとうございました。伝説のシューティングガードと試合できるやなんて夢のようでしたわ」

柳沼はバリキの脇に立つと見下ろすようにして言った。上背はバリキと同じくらいあるが腕や脚はバリキより細く全体的に華奢な印象である。顔立ちは女性と見紛うほど整っていて、流行りなのか顎に髭を生やしている。

「ま、えらいセコイ勝ち方されたのは残念でしたけど」

後ろでチームメイトが笑い転げる。バリキは立ち上がると柳沼と同じ目線になった。

「勝手に勘違いして油断したんはそっちのミスや。ま、ルールブックはよく読むことやな。三秒ルールは2005年に改正された」

言うだけ言うたとバリキは相沢を促して席を離れようとした。

「いやちよつと待って下さいよ。俺らも伝説のシューティングガードと話してみたいし」

センターをやっていたごつい男が揶揄するように言って通路を塞ぐ。

「俺は見せ物もんやない」

「それに柳沼さんが、良えもん見せてくれるんですって」

スモールフォワードがバリキの袖を引きながら言う。こいつは太鼓持ちか——へらへらした顔を見ながらバリキは思った。

「今度、柳沼さんお見合いしはるんですよ。相手はなんと、あの白澤商事の令嬢や。ね、滅多にない機会や。ええとこのお嬢の顔拝ましてもらいましょうや」

『興味ない』と言って腕を振り払って通り過ぎようとするバリキに柳沼が絡んだ。

「ま、遠慮せんと。今見とかんと一生見ることあらへんかもしれませんよ。なんせ、今まで財界のパーティーにも出たことがない深窓の令嬢らしいから」

失礼なことを言いながら柳沼はスポーツバッグのポケットからスナップ写真を取り出すとバリキの鼻先にぬつと突き出した。顔を背けるのも子供染みているので渋々覗き込む。次の瞬間、バリキは息を呑んだ。

写真の人物はバリキのよく知る女性だった。硬い表情でそこに写っていたの

は——しのぶだった。

※

「だから私は言ってやったんですよ」

十二月も半ば——今年も残すところあと僅かである。が、酔鏡のカウンターに漂う空気は十年一日の如く変わらない。客は今のところ、センセとバリキという異色の二人だけである。

「酔豚と餃子とどっちが好きかと訊かれて君ははっきりと答えられるのかね？」

言つてセンセは胸を張つたが、言われたバリキは言葉に窮しているようだ。「あれえ、また変わったメンツで呑んではること」

格子戸がかりと開いて吉田のおぼちゃんが顔を出した。

「外まで聞こえたで、酔豚や餃子つて、今日のテーマは中華か？」

言いながらおぼちゃんはホワイトボードを覗き込んで『あれえ？』と言つた。

お品書き

あつたかいもん

ホワイトボードには達筆な字でそう書かれていた。

「おばちゃん、ちゃうねんて。センセな今日、学校で失礼な質問されたんやて」
「え？なにになに？」

おばちゃんの頭の切り替えは速い。センセの隣にどっこいしよと言って座ると身を乗り出して尋ねる。

「研究室で娘達の写真を見せていたのです。そうしたら一人の学生が二人の容姿に魅了されたようで……。ま、それは無理からぬことなのですが、『先生はどちらのお嬢さんが好みなんですか』と愚かな質問をしてきたのです」

苦々しい顔でセンセは言う。

「で？で？なんて答えはったんですか？」

『はいどうぞ』と言わんばかりにバリキはセンセに手を差し出す。

「酢豚と餃子とどっちが好きかと訊かれて君ははっきりと答えられるのかね？と言ってやったんですよ」

相変わらずセンセは娘のことになると見境がない。おばちゃんは『ええと』と言って頬を掻いた。

「一つ訊いて良いですか？」

思い切ったようにおばちゃんは口を開く。

「どうぞ」

「それは、上のお嬢さんが酢豚で下のお嬢さんが餃子という……」

「それ、ツッコむとこかい」

「いや、大事なことやで。酢豚に喩えられるのはまだ堪えられるとして餃子はちよつと」

おばちゃんの不毛なツツコミで座はいつものごとく收拾がつかなくなる。

「ほい、おまちど。葦にち雑炊や」

タイミングを計ったように主人がバリキの前に料理を出した。

「へえ、一人鍋やん。贅ぜい沢やな」

舌したなめず舐りせんばかりにおばちゃんが覗き込む。

「やらんぞ」

撞木のように太い腕でガードしながらバリキは鍋にかかった。

「センセにはテールスープや」

「あ、それも美味しそう」

危険を察知してセンセが皿をおばちゃんから遠ざける。

「おばちゃんは何にしはる？」

主人に聞かれておばちゃんは迷わず『中華』と答えた。

「あと、紹興酒。うんと熱うして」

準備運動のように巨体を揺すりながら言う。からりと音がしてユウヤんがひよいと顔を覗かせた。

「あちゃ。やつぱり一番は無理やったか」

「ユウやんの頼むアテと一緒にや」

バリキが鍋から顔を上げて言った。

「甘過ぎやで」

座は一気に賑やかになり、店も本格的に動き始めた塩梅である。

「ああつ、センセのしようもない酔豚と餃子の話で忘れるとこやった」

おばちゃんがいきなり大声を出す。

「しようもないとはなんですか」

「えっ、なににな」

ユウやんが聞きたがったがさすがに誰もその話を蒸し返す気はないらしい。

『あとで、センセに聞いて』と一蹴された。

「一大事件やねん。なんと、しのぶちゃんに重大な秘密があつてん」

おばちゃんはワイドショーよろしく高らかに宣言した。バリキがすつと真顔になる。

「おばちゃん、ちよつとその話止めとかへん。人のプライベートをそれもその人がおらんとところで喋るんは良くないで」

「ちよつとバリキ、何マジになつてるん。単なるう、わ、さ。ホンマなわけないやん。深刻な話やったらあたしかて持ち出さへんわ。なんと、あのしのぶち

やんに……」

「ちよつと待ちて」

バリキの制止も虚しくおばちゃんが先を続ける。

「不倫疑惑」

「だから止めときて……。ええと、何それ？」

バリキは自分の努力が空回りしていたことを悟った。

「相手はなんと職場の教授やねんて」

今度はおばちゃんの逆隣でセンセがビールにむせた。

「ちよつ、ちよつと待つて下さい。職場の教授って工藤先生のことですか？」

「ええと、確かそんな名前やった」

「その話の出元はどこなんです？」

真顔になったセンセにたじろぎながらおばちゃんは『実はやね』と話しだした。

※

「ねえ、先輩聞かれました」

「何を？」

御崎先輩は目の前に出されたグラスワインに手を伸ばしながら訊いた。表情に乏しく、必要最低限の言葉でしか会話しないから知らない人を見ると不機嫌

そうに見えるらしい。それで先輩は損をしていると佳代ちゃんは思った。

三宮にある隠れ家的ダイニングバー。前からチェックしていて、今日思い切って先輩を誘ったのだ。やたら大きな声で喋っているおばちゃんがいったりしてちよつと騒がしいけれど、想像以上に料理もお酒も美味しいし、この店当たりやわ。佳代ちゃんは満足げにグラスを傾けた。

「工藤教授としのぶちゃんの噂です」

「あの二人がどうかした？」

「付き合ってるんちゃうかって」

「まさか」

御崎先輩は馬鹿馬鹿しいと言いたげに肩を竦めた。

「でも、夜遅くに研究室に二人きりでいるのを何度も目撃されてるし、この前なんか、センター街を並んで歩いてるところを町田さんが見たって」

「たまたまでしょ。二人がどうこうと言う以前に、私はあの結城さんが恋愛してるところが想像つかない。あの娘の精神年齢ってたぶん外見通り中学生で止まってるわよ」

「うーん、確かに外見のこと言われたらこの衝撃的な噂も怪しくなるんですよね。今どき、銀縁メガネにポニーテール。顔なんかほとんどすっぴんやもんなあ。中学生の方がよっぽどお洒落ですよねえ」

佳代ちゃんは赤ワインを舐めるように飲みながら考え込んだ。

「でもほら、工藤教授って前にも似たような噂がありましたやん」

いつの間にか、後ろのテーブルの声の大きなおぼちゃんが静かになっていることに佳代ちゃんは気付いていなかった。

「なあなあ、その話もうちよっと詳しく教えてくれへん」

いきなり耳元でドスの利いた声を囁かれて佳代ちゃんは飛び上がった。

※

「というわけで、たまたまその店の後ろの席に座ったんがしのぶちゃんの同僚やったというわけや」

「ま、噂やな」

気を揉んだことが馬鹿馬鹿しくなあって、バリキが投げやりに言った。

「言うか、その二人が言う通りやろ。あのしのぶちゃんが普通に恋愛してるいうのがわしもピンと来うへん。あの娘の相手が務まる相手はそうおらへんで、いろいろの意味で」

ユウヤんが失礼なことを言ったが、客達は深く頷いてしまう。

「しかし……」

一人、センセだけが難しい顔をしていた。

「工藤教授は研究者としては尊敬に値する方です。反面、女性関係については

……、こう言っではなんだが、度々良くない噂の立つ人ではあるのです」

「その工藤教授って若いんか？」

尋ねるユウやんの前に井が出てくる。

「卵かけにゆうめん。ま、卵かけご飯のにゆうめんバージョンやと思うて。シンプルやけどクセになるで」

さっそくユウやんは箸を割る。

「いえ、私より二歳年上で五十二歳だっと思います」

ユウやんが盛大に麺にむせた。おばちゃんが『きちやないなあ』と顔をしかめる。

「ちよっと待ちや。え？三十二歳年上で妻子持ち？……ないないない」
バリキが顔の前で団扇のように手のひらを振る。

「けど、わからんで。最近は年の差婚が流行りやし。もしかしたら、しのぶちゃん極度のフアザコンかもしれへんやん」

おばちゃんは手の中の湯割りのグラスをじっと見詰めながらしんみりと呟いた。

「それ本気で言うてる？」

「いや、言うてみただけ」

しれっと言って蓮華を取る。洋風仕立てのスープに浮かせた水餃子がいたく

気に入った様子で既に井の底が見え始めている。

からり

格子戸が開く音に客達は一斉に振り返った。

師走の宵闇を背にして、厚手のボアのコートに身を包んだしのぶが立っていた。

「こんばんは」

言いながら店に入ってくるなり、しのぶはカウンターに手を付いた。丸椅子に足をぶつけ、壁に寄り掛かり、どうも真っ直ぐに立ってない様子だ。

「ちよ、ちよっとどないしたん」

おぼちゃんが素早く駆け寄る。おぼちゃんの腕の中でしのぶは『ごめんなさい』と消え入りそうな声を出した。おぼちゃんに支えられて手近な丸椅子に腰をおろす。カウンターに寄りかかって、

「あの、熱爛を……」

と、嘔しわがれた声で言うと、そのままカウンターに顔を埋めてしまった。

「ちよっと……、酒呑んでる場合か」

バリキに言われて、顔をあげたしのぶを見て客達は息を呑んだ。目は半分眠ったように瞼がとろんと垂れ下がり、目の下に濃い隈ができている。艶やかな桜色の唇は無残にひび割れていて、頬の色も血の気が感じられない。

「悪いことは言わん。今日はこのまま帰り。おっちゃん、俺ちよつと送ってくるわ。また、戻ってくるから」

言ってバリキは立ち上がった。

「いえ、一杯だけでも良いんです」

頑なに言って、しのぶは肘で体を起こす。

「たぶん、私もうここには来れないと思うから……」

初めて店に来た時、『私、二十歳です。だからお酒呑めます』——そう言っ
しのぶはきっかりと主人を見詰めた。あの時と同じ強い眼差しを主人はその瞳
に見た。

「はいよ」

主人はいつもと変わらぬ声を張って棚から雪平鍋を下ろした。
からり

格子戸が開いた。客達が振り返るとおよそこの店の客らしからぬ二人の男が
立っていた。ダークグレーのスーツに暗褐色のタイ。服装は地味なサラリーマ
ン風だが、まるでアクション映画の俳優のように纏う空気に隙がなき過ぎる。
二人とも筋肉質な体格で上背も平均以上はありそうだ。襟に白い菊を象かたどったバ
ッチを付けているのが目を惹いた。そのバッチを目にした途端、しのぶの顔が
引き攣った。

「お嬢様、申し訳ありませんが時間がございませぬ。同行をお願いします」
ノーフレームの眼鏡をかけた男がしのぶの背後に立つと慇懃に言った。もう一方の口の上に髭を生やした男は店の入口にじっと立っている。

「何度もお断りしているじゃないですか。私は白澤家とは一切無関係です」
しのぶが素面の時にはかつて見せたことがないような大きな声を出した。そのままカウンターに手をついて立ち上がると男を押し退けて入口に向かおうとする。が、行く手を髭の男に阻まれた。

「来ていただきたいのです」

髭の男の言葉はその慇懃さとは裏腹に有無を言わせぬ響きが籠もっていた。呆気にと取られてそれを見ていた客達が一斉に騒ぎだした。

「ちよつと待ちや」

「その対応は乱暴が過ぎるでしょう」

「警察呼ぶで」

口々に客達が言い募る中、バリキが髭の男の前に立った。

「この娘はいややというてる。そこをどいてくれへんか」

しかし、男は微動だにしなかつた。それどころか、バリキの方を見ようともしずしのぶの腕を取った。

「行きましよう」

バリキの腕がぬつと伸びて、男の腕をしのぶから引き剥がした。男は初めてバリキの存在に気付いたように珍しい生き物でも見るような目でバリキを見遣った。が、次の瞬間の男の動きは神懸かり的に素早かった。男はバリキの脇をすり抜けざま身を反転させて背後に立つとやにわに羽交い締めにした。

「こら、離さんかい」

バリキはさかんに身もがいたが、信じられないことに身動き取れないらしかった。

「しばらくのご辛抱を。お嬢様をお連れしたらすぐにこの手を離します。榊」
男が顎をしゃくって合図すると眼鏡の男がしのぶの手を取って店を出ようとした。

「ちよつと待ち。あたしの目が黒いうちはこの店で勝手はさせへんで」

まるで自分の店のような物言いので吠えて立ち上がると吉田のおばちゃんが榊に躍りかかる。

「失礼」

榊はぬつと腕を突き出した。飛び掛かろうと勢いがついていたおばちゃんはいきなり目の前に出現した腕を避けきれず尻餅をつく。おばちゃんを見下ろしながら、榊は後ろ手で格子戸に手をかけた。

「ちよつと待ち」

声のした方を見るとカウンターの中で腕組みをした主人が険しい顔で榊を睨んでいた。

「これは鏡子さんの差し金か」

主人が静かに言った。

「答える必要はありません」

榊がにべもなく言っつて肩を竦めた。

「俺の店でこれだけの騒ぎを起こしといてその言い草はなんや。ここの店主が訊いてるねん。答えんかい」

腹の底から沸き上がるような声で主人は吠えた。

からり

格子戸が開いた。『あっ』榊が息を呑む声が聞こえた。榊を脇に押しやって一人の老婦人が店に入ってきた。

「何事ですか、この騒ぎは」

彼女は男達を一喝した。バリキを押さえていた男が慌てて腕を離す。老婦人は吉田のおばちゃんに手を差し伸べて立ち上がらせた。

それから彼女は主人に向き直ると深く腰を折って言った。

「伸一さん、ご無沙汰しております」

主人は苦いものを口に含んだような顔になって、じっと老婦人の帯の結び目

を見詰めていた。

「貴方のお店で数々のご無礼を働きましたこと、この者達に代わりお詫び申し上げます。けれど今は差し迫った状況なのです。ここは何もおっしゃらずにどうかしのぶを連れ帰らせて下さい」

老婦人はまた深く腰を折る。

「頭上げて下さい、鏡子ちゃん。話もできへんやん。一つ訊いて良えかな。貴方がしようとしていることはしのぶちゃんのためになると思うて間違いないか？あの時の俺らみたいにその後の人生で悔やみ続けなあかんことやないと信じて良えか？」

頭を上げた老婦人はきっかりと主人を見返した。

「はい」

迷いのない声で彼女は答える。主人はじつと彼女の目を見ていたがやがて『わかった』と言った。それから店の端でゆらゆら体を揺らしながら立っているしのぶに向かって言った。

「しのぶちゃん。言いたいことはいろいろあるやろうけど、今日のところは祖母さんと一緒に行き。あんた相当ひどい顔してるで。どっちにしても独り暮らしの部屋に戻って良えとは思えんわ」

主人の言葉を聞きながらしのぶは壊れた人形のように首を横に振り続けた。

「いやです。その人は母を見捨てた人です。あんなに何度も何度も手紙を書いたのに一度だってお見舞いに来てくれなかった。母が臨終のときも枕元に私人きりだった。亡くなる間際まであんなに会いたがっていたのに……」

しのぶは強く唇を噛んだ。

「その人にとっては駆け落ちして勘当した娘は縁のない他人と同じなんです。死のうが生きようが何の関心もないんです。だったら、私だってその人とは縁もゆかりもない娘です。私、絶対に行きません」

「貴方何を言ってるの？」

老婦人は厳しい顔つきでじつとしのぶを見詰めた。

「しのぶちゃん、気持ちにはわかるけど今日は病院にでも行くつもりでお祖母さんと帰り。詳しいことはわからんけどこの人がこう言うんや。このまま自分の家に帰ったら良いことがあるのは間違いない。その代わり……」

主人は改めて老婦人に顔を向けた。

「このままでは済まさへんから」

じつと彼女の目を見ながら主人は言った。

「鏡子ちゃん、ここにいてるお客さんはみんなしのぶちゃんのファンやねん。それだけやない、この一年で何がしか、しのぶちゃんの世話になった人ばかりや。そやから、このままでは気持ちの収まりがつかん。それは俺も一緒や。」

その差し迫った問題が片付いたら早々に一度この店に来てきつちり説明して下さい。それから、しのぶちゃんはお母さんが亡くなってからずっと貴方におだかまりを抱えてきたようや。差し支えなかったら、その席でこの人らにも立ち会ってもらって、とことん話し合って決着つけてほしい」

老婦人は主人の言葉を吟味するように長く沈黙していたが、やおら『わかりました』と言った。しのぶは小さな子供のように首を振って嫌がっていたが、主人が再三宥めるとやがて諦めたように老婦人とともに店を後にした。

店に残った常連達は気の抜けたようにぼんやりとしていた。口を開く者は誰もいない。新しく注文した料理や酒もあまり進んでいなかった。

「ご主人、何か事情をご存知なんですね。差し支えなかったら話してもらえませんか。このまま帰ったら今晚は眠れそうにない」

センセがとうとうたまり兼ねたように切り出した。他の客達も目顔で頷く。「さっきの人、どつかで見た気がすると思うんだけど、白澤グループの総帥の奥さんやなかったか？確か、白澤……鏡子」

ユウヤんが鰯大根を突つきながら言った。「なんで、そんな雲の上のような人を知ってるん」

吉田のおぼちゃんが訊く。白澤グループは世界的に有名な総合商社白澤商事を中核とする日本有数の一大コンツェルンである。総帥の白澤龍一は経済界だ

けでなく政界にも強い影響力を持つと言われている。

「仕事がらみやて。知り合いの弁護士事務所のトラブル解決を手伝ったときに見た覚えがある。写真でやけどな」

「俺、この前見てん……」

バリキは目の前のロールキャベツに箸もつけず言いあぐねていた。

「なにになに？言いたいことがあったら言う方が良えで」

「そやな……この前、バスケの試合した時に相手チームのキャプテンが自慢げに見合い写真を見せて来よってん。その見合いの相手がな白澤商事のご令嬢で、そいつは逆玉の輿を自慢したかったみたいや。その写真に写ってたんがしのぶちゃんやってん」

「ちよつと待ち。話を整理すると、しのぶちゃんは白澤家のご令嬢で、白澤鏡子やったつけ？あのお婆ちゃんは、しのぶちゃんに見合いをさせるために連れ去ったいうことか？ちよつと大将どないなってるのん」

吉田のお婆ちゃんが息巻く。

「いや、鏡子ちゃんがあそこまで言うねん。しのぶちゃんの意に反して無茶はせんはずや」

「えらい自信ありそうやけど、あれだけでかい組織になったら、総帥夫人であろうが、ご令嬢であろうが個人の意思なんて紙切れより軽いで」

ユウヤんが心配げな顔になる。

「すまんけど、今は俺を信じてくれとしかかよう言わん。必ず近いうちに納得いく決着つけさしてもらおうから」

主人は険しい顔で唇を結んだ。が、また唇を緩めると

「まあ、このまま帰ってもろたら、お互いに気色悪うてかなわんわな。今日のところは俺と鏡子ちゃんの因縁話でも聞いてもらおか」

思い切るようにそう言って主人は語り出した。

「俺は生まれも育ちも神戸や。というかこの店が建ってる場所で育ってん。生まれたんは昭和十九年。で、家の近所に菊地さんいう大きな家があつてそこに同じ年の鏡子ちゃんいう女の子がおつてん。経緯は忘れたけど、まだ三つ四つ頃にお袋に連れられてその家を訪ねて、その子の遊び相手になつてやってくれて言われてん。鏡子ちゃんはその頃ちよつと体が弱かつたから普通の子供みたいに外で遊べんかつたみたいやな。俺にしてみたら女の子と遊ぶんは退屈以外の何者でもなかつたけど、その家に行つたらお菓子がもらえる。ともかく年中お腹空かせてた時代やったから、どつちかという俺の興味は鏡子ちゃんやのうてお菓子に集中しとつたな」

主人は何か思い出したらしく、低い声で笑った。

「鏡子ちゃんな、よう気のつく子やったんやけど、俺がいつつも『お菓子、お

菓子』言うとしたから勘違いしよってな。どうも俺が料理人かお菓子の職人になりたいんやと思ひ込んでたみたいや。ある日、大事なことを打ち明けるみたいにこう言いよってん」

『なあ、大きくなったら一緒にお店しよ。お料理屋さんしよ』

「そのうち同じ小学校に入って、中学校に上がって、男子と女子やし普通は大きゆうなるうちに疎遠になっていくもんや。けど、よっぽど馬が合ったんかな。不思議と縁が切れることもなく、クラスが一緒になる、遠足の班が一緒になる、帰りが一緒になるねん。そしたらまあ何か喋るわな。それがどういうわけか料理のことばかりやねんな。知らず知らずに俺自身、料理に興味を持つようになった。恋愛感情があったか言われてもピンと来ん。男子も女子もない、ただ気安い友達と喋ってるいうだけやった気がする」

『ちよつとええかな』——そう断って主人はぐい呑みに生酒を注いだ。主人はぐつとそれを傾けて旨そうに呑んだ。客達は主人が酒を飲む姿を初めて見た気がした。

「鏡子ちゃんを見る目が変わったんは中三の時や。同じクラスに遠藤いうやつがおって仲が良かってんけど、そいつに訊かれてん」

『おまえ、菊地のことどう思うてるねん』

『どうもこうもないけど……』

『そやかて、一緒の班になったり一緒に帰ったりしてて仲良えやん』

『あんなたまたまやん』

「そう言うたら遠藤、心底あきれ顔になって『おまえはホンマ鈍感やな』っていうねん。鏡子ちゃん友達に頭下げて班を替わってもらったり、お前がクラブ終わるまで寒い廊下でじっと待ってるねんで。クラスで知らんやつ、たぶんお前だけや」

また一口酒を煽る。

「次の日からも俺は今まで通りに振る舞おうとしたけどどうもあかん。それからや、鏡子ちゃんのことを女子として意識し出したんは。そしたら、二人でお店持とういう話も俺の中でなんや現実味を帯びてきた。この娘と一緒に店持ったらこんな料理出して、店の内装はこんな風にして、って淡い夢描いたりしてな」

想い出を語る主人は楽しげで、それを聴く酔客達もなんだか温かい料理を口にしていく気分になった。

「その頃、二人で決めたルールがあつてな。一日に料理を一品考えるいうルールや。前の晩、考えた料理を放課後に持ち寄って二人で吟味してノートに付けていくねん。もう、食糧事情もだいぶ良うなつてたから休みの日に試作してみたりした。鏡子ちゃんは元々才能があつたんやろな。俺が思いもよらん料理を

次々考え付くねん。それが悔しくてあの頃は猛勉強したな。なんや笑えるやろ料理の猛勉強してる中学生って。で、鏡子ちゃんが知らんような料理を思い付いたときは勝った、って気分になるねん」

笑いながら主人はまた酒を煽った。

「一日、一品言うても馬鹿にできへんで。二人おったら一年で七百三十品、その習慣は三年続いたからノートに書かれた料理は二千品を超えとった。高校に上がってからもう一つ習慣が増えた。料理屋になるんやったらまずはいろんな料理の味を覚えなあかん。食べ歩きたいけど資金がないやん。それで、五十円玉貯金というのをやってん。家の手伝いやアルバイトで稼いだお金の中から五十円をよけて二十枚貯まったら千円札に両替して料理を食べに行くねん。まあ、三カ月に一回くらいやったけどあの頃の千円って今の一万円くらいの値打ちがあったから結構なもんが食べられたで。しのぶちゃんも初めてこの店に来た時、受け取った千円札をしまおうとして、あの娘は財布に千円札一枚きりって言うてたけど、もしかして俺らと、土曜日のおじさんと同じようにしてその千円札は生まれたんちゃうやろかって、気になったなあ」

ぐい飲みが空になった。主人が再び酒を注ぐ。

「高校二年の時、俺は鏡子ちゃんにプロポーズした『学校を卒業したら一緒に料理屋やろ』って言うてな。鏡子ちゃんはそれを受けてくれてんけど、そのす

ぐ後で状況が一変した。ある意味、おばちゃんと同じや」

主人がおばちゃんを見遣る。薄々事情を察したおばちゃんは黙って頷いた。「鏡子ちゃんの家は大きな事業をやってはってんけど、お兄さんがいてたし嫁にもろても差し支えないやろと俺は高をくくつとった。ところが、その事業自体が左前になってしもうて白澤商事からの支援を受けることになってん。ついては、両社の経営基盤を血族で固めるためにもその商社の若社長と縁組をいうわけや。あからさまな政略結婚やな」

主人はまた生酒を煽った。

「鏡子ちゃんがご両親からそれを告げられた次の日のことはよう覚えてる。登校したらな、鏡子ちゃんが何も言わんと俺の袖引つ張るねん。その顔見てぎよつとしたで、一晩でお婆さんか幽霊にでもなったみたいにやつれ果ててるねん。そのまま校舎の裏に連れて行かれて、鏡子ちゃんはしゃくりあげながら延々と両親や兄貴への恨み言を繰り返していった。慰めようもない言うか、俺の方が泣けてきたわ。何もした覚えがないのにある日目が覚めたら描いてた夢が幻に変わってたんやもん。思い詰めとったんやろな俺も。唯一、鏡子ちゃんを泣き止ませる方法はこれしかないと思うてそれを実行に移した。丁度、五十円玉預金は千円になったとこで懐はあったかかったし、鏡子ちゃん連れてそのまま逃げん」

「なんか感覚がマヒしてる言うか……」

ロールキャベツをあらかた平らげたバリキが自嘲気味に言った。

「しのぶちゃんのお前の話を聞いて、吉田のお婆ちゃんの話も聞いて、おっちゃんの話も聞いてると、駆け落ちって日常茶飯事な気がしてならんけど」

「いえ、明らかにそれは感覚がマヒしてありますよ。私は自分の研究室の女子学生と結婚したのですが、最後まで怯まず彼女の両親を説得しました」

思わぬところでセンチセがカミングアウトして一同は仰け反る。ユウやんが『ま、センチセの惚気話は置いといて先を聞かせてもらおか』と言って主人に話を戻した。

「いや、もうあんまり先はないねん。その夜、俺らは結ばれた——って綺麗な言葉やね」

「自分で言うて照れないな」

「けど、あれは鏡子ちゃんにしたら最後の想い出作りやったんやな。あの夜、鏡子ちゃんは今もう覚悟を決めとった。自分の我が儘で家族を困らせることはできへんって。次の朝、起きた時には鏡子ちゃんは消えとった。俺の枕元には一枚の手紙と三年分のレシピを書いたノートだけが残っとった」

『あかぬ日のつひの別れぞ
わがふるき日のうた』

手紙には流麗な女文字で三好達治の詩が綴られていた。が、そのあちこちに落ちた滴がインクを滲ませているのが痛々しかった。

「次の日から鏡子ちゃんは学校に来んようになった。結局、俺が鏡子ちゃんに最後に会うたんはその駆け落ちの夜や。俺は高校を出て普通の会社に勤め出してんけど、両親が亡くなつたのを潮に会社を辞めて家を改装して居酒屋を始めてん。それが『酔鏡』の始まりや。この店の料理の基礎は鏡子ちゃんと毎日二人で考えたその時のノートやねん」

「この店の名前の由来な、高校の頃に店持つんやったらこれが良いって俺がずっと言うてた名前やねん。鏡子ちゃんは恥ずかしいからいややうて言うててんけど」

『夢心地に鏡子に酔う店——酔鏡』

「店の由来は、『高校の時に初恋の人に振られて、一途な想いで独身を通した酔狂な美少年がやってる店』というのが正しい」

言うて主人はにっと笑った。

「二十年くらい前や。ある日いきなりその白澤家から人が来て、家捜しさせろと言いだした。こっちはわけがわからんやん。その人を宥めて事情を聞くと、一人娘が駆け落ちしたんやうて。それでここで匿ってるんちゃうか言われて……、えらい濡れ衣やな。けどおかげで、涼子いう一人娘が生まれたこと、その

娘が結城いう学生と駆け落ちしたことを知った」

主人はバリキとセンセに向き直って言った。

「先月、しのぶちゃんの名字が結城やて分かった時は肝を冷やしたで。珍しい名前やもん。しかも、しのぶちゃんの両親も駆け落ちした言うてる。もしやっ
て思うわな。そしたら、あの牡蠣のしぐれ煮の話や。あのオイスターソースの
アイデアを考えたんは鏡子ちゃんや。しのぶちゃんのお母さんが作るしぐれ煮
が同じ味やったということは、お母さんにその料理を教えたしのぶちゃんのお
祖母さんというのとは間違いなく鏡子ちゃんやと確信した。ということのはしのぶ
ちゃんの意志は置いといて、あの子は白澤グループ総帥の直系のご令嬢やと気
付いた。いつか、今夜みたいなきごとがあるかもしれんとちよつと覚悟はしてて
ん」

主人はぐい飲みを傾けて生酒の残りを呑み干した。

それから数日後、白澤鏡子から差し迫った状況は收拾が付いたと酔鏡に連絡
があつた。ついては過日の約束を果たすべく貴店に赴くので皆様のご都合を知
らされたし――

主人が音頭を取って常連達の予定を摺り合わせ、十二月二十四日に日取りが
決まった。そして当日、常連達に一通の電子メールが一斉に送信された。

今宵、酔鏡にて

結城しのぶさんと白澤家の確執につき決着を付ける由。
各位万障繰り合わせてご同席お願い申し上げます。

その日は三連休の最終日。明日は平日にも拘らず三宮や元町の繁華街はイヴの雰囲気を楽しみむ人々でごった返していた。折しもエスニック料理が売りのチェーン店の居酒屋から二十人ばかりの客が繰り出してきて街路をひときわ賑わしている。

そんな街の喧騒と同じ時間を共有しているとは信じ難い程、その店は神戸の片隅に静かに建っていた。

『酔鏡』

赤い提灯が灯り、墨痕鮮やかに店の名が浮かび上がる。店の格子戸には達筆な手で『本日貸切』と書かれた紙が貼られていた。店の前の路地、はるか東側の入口に小柄な人影が現れた。人影はかなり草臥くたびれた動きながら、それでも全力疾走してくる。トレードマークのパンチパーマから湯気を立てんばかりの疾走の末、ユウやんは真新しい格子戸に飛び付きざま引き開けた。
からり

「すまん。遅うなってもた」

先客達が一斉に振り返る。バリキ、センセ、吉田のおばちゃんが固まって座っている。その集団から離れてL字カウンターの他方、その両隅に着物姿の白澤鏡子としのぶが座っていた。

「遅いやん、何しとったん」

早速飛んでくるバリキの声にユウやんは片手拝みした。

「すまんすまん。ちよつと弁護士と打ち合わせ」

事情を察してバリキもそれ以上何も言わなかった。

「ほな、始めさしてもらおか」

主人が司会者のように宣言した。

「まず料理やけど、今日は喋ってもらうんが目的やから、俺のお任せでやらしてもらおうと思うてます。酒は適当に頼んで」

主人の背後のホワイトボードには、

お品書き

大つごもり

と、書かれてあった。

「まず、お付け出し。先月と被って悪いけど牡蠣のしぐれ煮を出さしてもらお」
魔法のような手際で客達の前に小鉢と酒が並べられていく。『しのぶちゃん
と鏡子ちゃんはお酒どないする？』と主人が訊くと二人とも黙って首を横に振
ったのでほうじ茶が出された。料理は出揃ったが口火を切る者がおらず客達は
皆押し黙ったままだった。心なしか店の明かりまで暗く感じられた。

「……ええと」

ユウやんが緊張に堪えかねたような声を出す。

「このまま黙とつても始まらへんで。どう進めたら良えかようわからへんけど、
とにかく何か喋らへん？それで……、何の話するんやったっけ？」

皆がかくんとなる。

「先日の一件の真意も気になりますけど私としては何より、しのぶさんがお祖
母さんに抱いているわだかまりを解くことを最優先にしたいのですが。あ、冷
めないうちに食べましよう」

そう言つて、センセは率先して箸を割った。

「あたしも賛成や。この前、しのぶちゃんを連れ去ろうとした一件の真相がな
んやったかなんて興味はない。知りたいのは今もこれからもしのぶちゃんに困
ったことが起きへんかどうかその一点だけやし、それは後回しでも良え。まず
は、しのぶちゃんがお祖母ちゃんを恨めしく思うてるお母さんのことをすっ

きりさせてあげたいわ」

おぼちゃんがしぐれ煮を口に入れて目を瞠った。

「いやっ、このしぐれ煮上手に作ってはるわ」

バリキやセンセはそっと鏡子の表情を盗み見たが、彼女は表情を変えることなく黙ってしぐれ煮に箸をつけていた。

「俺も基本的にセンセやおぼちゃんの意見に賛成や。しのぶちゃんが不幸になるようなことがなかったらそれで良え。けど、一つだけ質問して良えかな。俺、しのぶちゃんも納得ずくのことか？」

バリキが尋ねた。それまで無言で無表情だったしのぶの顔が一瞬強張った——ように見えた。

「何故、あなたがその話をご存知なの？」

驚いたように鏡子が顔を上げて、値踏みするようにバリキを見詰めた。

「まあ、良いでしょう。いずれにしてもその話は終わったことです」

「ということは、なしになったんか？」

バリキの問いに、この男は何を言っているのだと言わんばかりに鏡子は眉を上げた。

「いいえ。しのぶと柳沼さんのお見合いは先週の日曜日に済んだと言ってい

るのです」

途端に座は騒然となった。あるいは捲くし立て、あるいは恐る恐る、質問の矢を飛ばす常連達と対照的に鏡子は泰然とほうじ茶を啜っていた。しのぶは表情を硬くして俯いたままだ。ひとしきり続いた矢継ぎ早の質問が収まると鏡子は湯飲みを置いて顔を上げた。

「お見合いの話は皆さんとの意見の相違とちよつとした誤解があるようですが、いずれにしても瑣末なことですよ」

『瑣末なこと』という言葉に反応して客達がまた騒ぎ出す。

「いずれにしても物事には順序というものがあると思います」

静かな口調にも拘らず鏡子の言葉には人を沈黙させる威厳が備わっていた。店の中はまた静かになった。

「まずは皆さんが仰るように、しのぶの私に対するわだかまりを解きたいと思うのですが、如何でしょう」

常連達は不承不承という顔で頷いた。と、それまで俯いていたしのぶが跳ね起きるように顔を上げた。その顔を見た常連達はたじろいだ。いつもの楽しい表情も、悪戯っぽい笑みも、そんなものは初めからなかったかのように消え失せて、ただ絶望的に暗い目が上目遣いにじっと客達を睨んでいた。

「わだかまりを解くってどういうことですか？何も知らないくせに。その人が

母と私にどんな酷い仕打ちをしたのか、母が死んでから私がどんな気持ちで毎日過ごしてきたのか。何も知らないくせにいい加減なことを言わないで下さい」しのぶは肩を震わせた。その恨みがましい眼差しで見詰められると、まるで大人の理不尽な振る舞いに抑え付けられて、抗う術もなく、泣きながら身もがく幼女を見ているようで誰も何も言えなくなる。

「冷静におなりなさい。そんな物言いでは話し合いになりません」鏡子の言葉は老練な女教師が生徒に接するように冷徹に響いた。

「私は長く貴方のお母さんの死を知りませんでした。それを知った時はむしろなぜ知らせてくれなかったのかと貴方を恨めしく思ったものです。私が駆け落ちをした娘を許さなかったことを根に持って貴方がそんな仕打ちをしたのだらうと思っていました。けれど、先日こちらで貴方は何度も私に知らせたと言いました。私には何か行き違いがあるのでしょうか思えないのです。でも、白澤家に来てから貴方は一切その話をしてくれないじゃありませんか。この方達の前から話せるかしら。いったい何があったのか話してちょうだい」

鏡子は出来の悪い生徒に接する教師ながら噛んで含めるように諭した。しのぶは唇を噛んで幼子が拗ねるように無言で鏡子を睨んでいたが、鏡子の冷徹な眼差しは怯まなかった。やがて、しのぶはしよんぼりと肩を落すと訥々と話し始めた。

「父が地震で亡くなってから母は一人で私を育ててくれました。私、母が大好きでした。駄洒落好きで、とびっきりの美人なのに、こてこての関西弁を使うギャップが可愛くて、そしてどんなにつらいことがあっても私の前では笑ってた——そんな母が好きでした」

しのぶは少し冷めたほうじ茶に初めて口をつけた。『煎れ替えよか？』と尋ねる主人の言葉にしのぶは首を横に振った。

「六年前、私が中学三年の秋に母は乳癌を患いました。すぐに病院に行ったのですけど、もう手遅れだつて……」

しのぶの声はか細く今にも消え入りそうだった。

「年が若いほど癌の進行は速いそうです。三十八歳だった母は日を追う毎に痩せていきました。母は謔言で何度もあなたの名前を呼んでいました。……私、なんとかして母にあなたを会わせてあげたかった」

しのぶはまるで縋り付くように、両手で湯飲みをギュッと握っていた。

「今思うと、母はただあなたに会いたかったわけではなく、死期を悟って私の事を委ねるために会いたがっていたのかもかもしれません。最初は電話帳を調べて電話をかけました。どなたか男の方が出られたのですが、私がおどおどと話しているうちに間違い電話だと思われたみたいで、いきなり切られてしまいました。その頃の私は今以上に子供のような声だったので殊更にそう思われたのか

もしれません。考えてみるとそれまで私は学校の友達以外の人、ましてや大人の人ときちんと話した経験がまるでなかったんです。慌てて二度、三度とかけるうちに声を覚えられてしまって、最初から陰のある声で受け答えされるものだからますますパニックになって……。とうとう『これ以上しつこいと警察に通報する』とまで言われました。これはいけないと思っ慌てて自分から切つてしまいました」

「それで手紙を書いたというわけか」
バリキが尋ねるとしのぶは小さく頷いた。

「十二月に入って母の容体はいよいよいけなくなってきた、手紙なら確実にあなたに届くだろうと思っったんです。何度も何度も書き直してやっとなあなたに手紙を出しました。なのに、三日待っても五日待っても何の連絡もなかった。もしかしたら事故か何かで手紙が届かなかったのかもしれない——そう思っつてまた書きました。けれどやはり連絡はありませんでした。母の容体はますます悪くなる一方で焦ってまた電話したりしましたが、身構えてしまっつていたからでしょう。相手が出たら自分でも何を喋っつているのか分からず、気が付いたら受話器を置いて有り様でした」

「いっつそ直接会いに行っつた方が早かっつたんちゃう」
吉田のおばちゃんが言う。小鉢が空になっつたので次の料理が出されてる。

冬至かぼちやに大根餅である。見慣れてはいるが、改めて見るとかぼちやは橙色の果肉と緑の皮のコントラストが実に鮮やかである。大根餅もそのキツネ色が香ばしい香りをいっそう引き立たせていた。

「お屋敷の前までは行きました。でも、それからどうしたら良いのか、何をどう話して良いのか分からず逃げ帰ってしまいました。あの頃の私は臆病で世間知らずの子供でした」

「いやいや、それはいくらなんでも人見知り過ぎるんちゃう？お母さんが危ない時やねんで」

呆れるおぼちゃんの袖をユウヤンが引いた。

「おぼちゃん、首相官邸にアポなしで入って行く勇氣あるか？」

「また大仰な譬えやな。そんなあるわけないやないの」

「いや、あの邸はそういうところやねんで。大のおとなでも足が竦むわ」

ユウヤンの言葉にしのぶは小さく溜息をついた。

「大きな門の前で竦んでしまった時、私は如何にそれまで母の厚い庇護に守られて育てられて来たかを思い知りました。その母の命の火が今にも消えようとしている。消えてしまったら私はこの世界でたった一人になってしまう。そう思うと心細くてたまりませんでした」

しのぶの前にもかぼちやと大根餅が並べられた。

「ちよつとでもええから食べた方が良えよ。冬至かぼちやは風邪知らず言うて体に良えねん。相変わらず疲れた顔してるみたいやし」

主人の言葉にしのぶは素直に頷いて箸を取った。

「母が亡くなる一週間前からは二日に一通は手紙を出していました」
しのぶはまた鏡子を睨んだ。

「六年前の今日。十二月二十四日——クリスマスイヴの日に母は亡くなりました。母が息を引き取った時、枕元に居たのは私だけでした」

真冬の早い夕暮れ時、病院の窓から差す光はたちまち頼りなくなり、窓の外は真っ暗になった。看護婦が誰か他に身内の方はいないのと気遣ってくれたが、しのぶは首を横に振るしかなかった。母があれほど会いたがった人はどうとう来てくれなかった。

諸々の手続きをするためにしのぶは一度家に戻らなければならなかった。病院を出て駅に向かう道すがら、あちこちの家を飾る美しい電飾が目に入った。それはどこか遠い国の光景のようにしのぶの瞳には映った。

連休明けの平日にも拘らず、地下鉄の中はイヴを三宮で過ごそうという人達で溢れ返っていた。華やかな洋服で着飾った恋人達、数名で固まってこれから会う女の子達の噂を大きな声で話す若い男の人達。しのぶは壁にもたれて虚ろな眼差しで楽しげな人達を眺めていた。五、六歳くらいの女の子が向かいの席

に座っていた。女の子は両隣のお父さんとお母さんを代わる代わる見上げながら夢中で何か話していた。しのぶは血が滲むほど強く唇を噛んでそれを見ていた。

電車が三宮に着いて、乗り換えのためにしのぶは街に出た。繁華街はイヴの雰囲気を楽しむ人々でごった返していた。折しもエスニック料理が売りのチェーン店の居酒屋から二十人ばかりの客が繰り出してきて街路をひととき賑わしている。こんなに大勢の人が歩いているのに。何千何万という人がこの街にはいるのに。

しのぶは一人ぼっちだった。

そう思った途端、壊れた人形のように膝が崩れ、しのぶはその場にしゃがみ込むと声を上げて泣き出した。道行く人はあるいは好奇の目で薄笑いを浮かべながら眺め、あるいはイヴの雰囲気を損なう異物を見たように顔を背けて足早に通り過ぎた。皆、イヴの夜に煩わしい事になど巻き込まれたくはなかったのだろう。終ついにしのぶに声を掛ける者や手を差し伸べる者は誰もいなかった。

どれくらい時間が過ぎただろう。やおら、しのぶは立ち上がり、しゃくり上げながら歩き始めた。母と暮らした家に。もう誰もいなくなってしまうたあの部屋に向かって。

「貴方が送ってくれた手紙には正直記憶がないの。御免なさいね」

鏡子の声がしのぶを回想から呼び戻した。

「どんな封筒に入っていたのかしら。普通の茶封筒？」

思いの外に柔らかな声で尋ねる祖母に戸惑いながらしのぶは答えた。

「いえ、初めてお祖母さんに送る手紙ですから精一杯可愛らしい封筒を選んだつもりです。雪の結晶模様をあしらった封筒や山小屋の外に雪だるまが立っているイラストの封筒に見覚えはありませんか？地の色は薄い青で雪だるまが立体的になっっていて、とても特徴のある封筒だと思うんです」

記憶を辿りながらしのぶは懸命に説明した。しかし鏡子は首を横に振って『ごめんなさい』というばかりだった。

「もしかして、あれちゃうか」

焼酎の湯割に手を伸ばしながらバリキが言った。

「時々、ニュースになってるやん。配達のアルバイト君が寒くてしんどかったから言うて、配達をサボって手紙を自分の部屋に隠しとったとか」

言われたしのぶは小首を傾げて考えたが、すぐに首を横に振った。

「私、本当に何通も送ったんです。それに十二月に入ってからイヴまでには三週間近い期間があります。そんな長い間、その地区の手紙が不達になったら大きなニュースになっていると思います」

『そらそうか』と、首を振ってバリキはまた考え込んだ。

「ああっ」

吉田のおぼちゃんが出し抜けに大きな声を出した。皆がぎよっとした顔で振り返る。

「そういえばしのぶちゃん、自分は世間知らずの子供やったって言うてたよね。もしかして封書の料金が八十円に値上げされたことを知らなかったんちゃう？」

「どや？という顔で一同を見回す。しかし、しのぶは即座に首を横に振った。

「確かに封書の送料は昭和五十六年に六十円に、平成元年に消費税導入で六十円に、平成六年に八十円に値上げされています」

澀みなく答えるしのぶにおぼちゃんは肩を落した。

「でも私はそれを知っていましたし、万一料金不足の手紙を出しても送り返されて来るか、相手局まで手紙が行っていれば宛て名の住所まで届けられて不足分が請求されます」

「そうなんや。けど相変わらずの博識やね。今すぐ郵便局の受け付けができるで」

おぼちゃんは『ええと』と呟いて、次の考えを巡らし始めた。

「先程から伺っているとしのぶさんの電話を受けた方は使用人、その対応と口調から推して恐らくは執事のような立場の方ではないでしょうか？」

センセはワイングラスをカウンターに置きながら言った。折角のクリスマスだからと言って、すっかりしたボデーのチリ産ワインをボトルでオーダーしている。

「ええ、執事の青野だと思います」

「お話を伺っていると些か思い込みが激しく白澤家に入ってくるものに対して頑なな対応をとる方とお見受けしました。要は電話の場合と同じだったのではないでしょうか？手紙は届いていた。けれど、その青野さんが仕分ける際に勘当されたお嬢様の身内からの手紙と気付いて握り潰していたのです」

センセは自分の説に頷きながらグラスを持ち上げた。本当は歩き回りたいところだが、鏡子に遠慮してその衝動を抑えているのかもしれない。

「それはあり得ません。青野はそのような出過ぎた真似をする男ではありません。そもそも差出人はしのぶになっていたのですよね」

しのぶは小さく頷いた。

「青野は涼子の娘の名前を——結城しのぶという名前を存じません」

「ああっ」

再度、おばちゃんの声が声を上げる。これにはさしもの鏡子もたじろいだ。

「仕分けで思い付いたんですけど、白澤グループの総帥のお屋敷やもん、仕事の手紙も届いたりするんじゃないですか？」

頷く鏡子に力を得ておばちゃんは続けた。

「それやな。しのぶちゃんの手紙は何かの手違いで業務用の方に仕分けられてしもたんや。それでお祖母ちゃんには届かんかったと」

「あのなあ、どこの世界に雪だるまや雪の結晶やて、そない可愛らしい封筒を使った業務用の手紙があるねん」

バリキがツッコむ。

「いや、意表について……」

そんなところで意表をつく業者はたぶんいない。

「それに差出人はしのぶちゃんの個人名になっとったんやろ。却下や」

おばちゃんは『うーん』と唸ってまた考え始めた。

「ちよつと良えかな」

カウンターの向こうから主人が言った。

「今までの話をまとめると、どうもお宅までは手紙は届いとったみたいや。けど鏡子ちゃんを受け取ってないという。氣い悪うせんと聞いてほしいねんけど、一人だけ手紙をなかったことにできるお人がいるんちゃうやろか」

主人はじつと鏡子を見詰めた。

「夫の白澤龍一のことを仰っているのですね」

鏡子は考え考え、言葉を選びながら語った。

「確かにあの人は世間から言われているように仕事の鬼です。でも涼子のごことは溺愛しておりました。あの娘が駆け落ちした時、居所を調べもせず、強引に連れ戻しもせず、徹底的に無視したのはプライドのためではなく、あの娘をやはり愛していたからです。居所がわかれば白澤グループの総帥として跡取り娘を連れ戻さないわけにはいかなくなる。徹底的に無視することが、あの人のギリギリの妥協だったのでしょう。あの人は愛情は人の弱さだと考えている節があります。そして人に弱みを見せたがらない性分ですから愛し下手なのです。そんな人が娘の危篤を知って黙殺できるとは思えません。黙殺するメリットもありません」

夫人がそう言うのであれば白澤龍一が手紙を握り潰したという線も薄そうに感じられた。

「あーもう、ほんま学習能力のない人らやな」
突然、ユウヤんがじれたような声を上げた。

「下手な推理をいくつ並べたって時間の無駄やと、この一年で学習せんかったんか。折角名探偵がいてるねん。その推理を聞くのが早道に決まってるやん」
「そもそも、そのしのぶちゃんがこの五年間答えを出せじまいやからこうやって皆でああでもないこうでもないって考えてるんやんか」
バリキの言葉をユウヤんは手を振って否定する。

「それは、お祖母ちゃんが手紙を無視しとったという思い込みから推理を進めてなかっただけの話や。実はお祖母ちゃんの手到手紙が渡ってなかったという前提に立ったら必ず答えに辿り着くて」

「そらそうか。ほな、しのぶちゃん、メガネとポニーテールを解除したって。あ、その前に酒を呑まんとあかんのかな」

この段階まで素面しらふでいるしのぶを見たことがないからバリキも要領を得ない。

「どういうことですか？」

鏡子が怪訝くわんげんそうな顔をした。バリキはしのぶが酒を飲むと急におどおどした性格が引つ込み、饒舌じょうぜつな関西弁に変わることに、更に銀縁メガネを外し、ポニーテールを解くと容貌や仕種が二十歳の娘に變貌し物語に出てくる名探偵のよきな推理能力を發揮することを話した。

「今年の一月に初めてこの店に來た日から何べんも、お客が抱えて持て余して謎を解かしたのはたんですわ」

バリキは我がことのように自慢げに語った。が、それを聞いた鏡子の表情は急に険しいものものに変わった。

「しのぶ、貴方はなんて軽率なことをしたのです」

鏡子はしのぶを見据みぞえると、あからさまな叱責口調で言い募った。

「その場の思い付きで滅多なことを人様に言うものではありません。貴方のその一言がその方の生活や人生を左右することもあるのですよ。ましてや情報の限られた居酒屋の世間話を基にして、したり顔で推理を巡らすなど以ての外です。その場で知られていない情報が貴方の推理を否定するかも知れないではないですか。酩酊した思考が論理を誤らせてしまうかも知れないではないですか。それを軽佻浮薄にも悦に入って探偵を気取るとは軽率以外の何者でもありません」

しのぶは何か言い返しかけたが、今の言葉が余程堪えたのだろう。黙りこくって俯いた。

「しのぶさん。貴方が萎縮したり、気を咎める理由はどこにもありませんよ」不意にセンチが鏡子に負けず劣らぬ険しい口調でしのぶを励ました。それから鏡子に向き直ると真剣な眼差しを向けた。

「お言葉ですが少々勘違いをされておられるようです。しのぶさんは一度たりとも探偵を気取ったり推理を弄んだりしたことはありません。バリキの譬えも不味かったです。物語の探偵のように得々と推理を披露して悦に入ったこともありません。というより、しのぶさんにとって真相の究明はいつも二の次で本当に心に懸けておられたのはその謎を持って余している人の心の棘、屈託をどうしたら取り除けるかということでした。そして彼女は時に優しく、時に厳

しく、それこそ全身全霊を懸けて、私達の心の中のわだかまりと真摯に向き合
って下さったのです」

客たちは口々に言い募った。

娘達の夢を素直に応援してやれない自分の背中を押してもらったことを。犯
人の追求よりも弟が傷つきはしないかと気遣ってもらったことを。愛して止ま
ない人の言動に深く傷ついた自分にそれは誤解だと心を解きほぐしてもらっ
たことを。娘の臨終を悔やみ続けて前に進めないでいる男の背中を後押しした
ことを。友人のためにすべきことを見誤って、道を外しかけた自分を済すめてく
れたことを。

「しのぶちゃんの推理はいつつもただの方便やねん。真相に辿り着くためのも
んやない。その人を済すうためのもんやっせん」

主人が締め括るようにそう言った。鏡子は矢継ぎ早に語る客達の言葉よりも、
その仕種や眼差しが懸命であり、必死であり、真剣であることに驚かされた。
ひとつ大きく息を吸ってから鏡子は口を開いた。

「みなさん良い方ね」

客達は初めて鏡子が笑みを浮かべるのを見た。常の厳しい顔付きからは想像
し難たい、意外に可愛らしい笑顔だった。

「しのぶ、ごめんなさい。聞き齧かった情報で当て推量をしたのは私の方でした。

貴方はこの方達にとっても、このお店にとってもなくてはならないと思って頂けるだけの働きをしたようですね」

居住まいを正すと鏡子は厳しい顔付きに戻った。

「手紙が私の手元に届かなかった真相は貴方の説明とこの方達の推理を聞くうちに私には解きました。それを説明するのはた易いことですが、この謎は貴方自身で解きなさい」

鏡子はじつとしのぶを見詰めながら続けた。

「但し、お酒はなしで。メガネとポニーテールを外すのもなしです」

それを聞いて客達はどよめいたが鏡子が『実は……』と切り出すとすぐに静かになった。

「しのぶにも、みなさんにも、今日ここに来た目的があると思うのですが、実は私にもあるのです」

『それはしのぶのことです』と、鏡子は言った。

「先日、白澤家にしのぶを連れ帰って十日ばかり経ちます。その間私はしのぶを見ていて、これは普通ではないと思いました。振る舞いも話し方も考え方でまるで中学生のままなのです」

「そら、そちらのお屋敷に行つてからしのぶちゃんは一度も呑んでないやろうしな」

バリキが率直な意見を述べた。

「そこです。先程、そちらの大きな方——バリキさんと呼ぶのね——の説明を伺ってようやく私も合点が이었습니다。みなさんも身の回りでそう言った経験はありませんか？お酒を呑んだ途端に人格が変貌してしまう人がいるのを」

「嫌になるほど、そういう奴を知つとるわ」
ユウヤんが笑った。

「服装や髪形が変わると口調や仕種が変わってしまうことがあるのを」

「それもあるな。特に女性に多い」

吉田のおばちゃんが頷く。

「どちらがその方の本質かと問われれば私はどちらもだと答えます。そう言った一面も持ち合わせているというだけで、全部合わせて一つの人格だと思いません。では、どちらがよりその方の自然体に近いかと言うと……」

「わしは、酒呑んでる時の方がその人の素が出る気がするな」

「服装で言うとおばちゃんが素が出やすい気がする」

ユウヤんとおばちゃんは口々に言ったが、何かに思い至ったように『あっ』と声を立てた。鏡子が大きく頷く。

「バリキさんは、まるでしのぶが変身するかのようにおっしゃいましたけど、私は逆だと考えています。お酒の力を借りて、服飾品を外すことでのぶは本

来の姿に戻っていたのだと思います。言い換えれば、しのぶの本来の姿はみなさんがごらんになった二十歳の娘の姿なのです」

鏡子は立ち上がるとしのぶの隣の丸椅子に移った。そつと手を伸ばすとポニ―テールを結っている桜色のリボンに触れてその感触を確かめた。

「これは涼子が使っていたものね。そのメガネも涼子に買ってもらった品じゃないかしら」

しのぶは小さな子供のようにくくと頷いた。

「貴方はこのリボンやメガネに守られて来たのね。これを身に着けていることで自分は一人じゃないと言ひ聞かせて」

しのぶは唇を噛んで俯いた。

「でも逆にこのリボンやメガネに縛られてしまった。貴方自身が変わってはいけない。お母さんと別れた時から貴方が変わってしまったらリボンもメガネも効力を失くす。あの時の自分がもういないようにお母さんももういないと分かっている。自分が世界でひとりぼっちだと思ひ知らされてしまう。だから貴方は中学生さながらの姿から変わるわけにはいかなかった」

バリキが抗議の声を上げようとしたがセンスが手で制した。客達と主人は固唾を呑んで二人を見守った。

「でもね。どんな姿をしていても、どんな口調でも、どんな仕種でも貴方は貴

方よ」

鏡子は両手でしのぶの手を握った。

「さあ解いてご覧なさい。ヒントは三つもある。白澤グループの中核をなす事業は何？お母さんが亡くなった時期はいつ？そして貴方が送ってくれた手紙の外観はどんなだった？もし解くことができたなら、私が決して貴方やお母さんを見捨てたのではないことが分かる。貴方は決して独りぼっちじゃなかったことを知る」

しのぶはそっと目を閉じた。長い睫毛が揺れて瞼が震えているのが分かる。眉間に皺が寄り、唇がへの字に結ばれた。やがて——固く結んだ唇が緩み瞼が開かれた。

「ごめんなさい。何も思い付きません」

首を横に振るしのぶの肩を掴んで鏡子はその目を覗き込んだ。

「簡単に諦めない。意識を集中して、想像力をもっと働かせなさい。さあ、目を閉じて」

再び鏡子に手を握られてしのぶは瞼を閉じた。

「ここは白澤家の居間です。今は2002年の十二月。さあ、貴方の手紙はどこ？」

しのぶの睫毛が再び震えた。頬が二度、三度痙攣する。項うなじの上でポニーテール

ルが揺れた。

不意にしのぶの背筋がすっと伸びてその体が一回り大きくなったように見えた。その唇が緩やかな弧を描き笑みを作る。頬の桜色が濃くなる。そして――目尻から一筋透明な涙が頬を伝って落ちた。瞼が開かれ、二、三度瞬いてからしのぶは目の前の祖母をじっと見詰めた。

「おかえりなさい」

この五年間、しのぶが誰かに言ってほしくてたまらなかった言葉を祖母は口にした。

「ただいま」

言いたくてたまらなかった一言を口にするとしのぶはそのまま祖母にしがみついて泣いた。

「淋しい想いをさせてごめんなさい。つらかったよね」

そう言って鏡子はしのぶの肩をしっかりと抱き締めていた。

「今日のメインディッシュ。骨つきもものローストチキンや。クリスマスらしいやろ」

主人が客達の前に大振りの皿を並べると歓声が上がった。キツネ色に皮がパリッと焼けた鶏肉にバターの香りが匂い立つソースがかかっている。上に散ら

した赤と緑のピーマンの微塵切りがクリスマスらしさを演出していた。

「いや、ほんまにこの料理が出せるか冷や冷やしたで。ま、俺は基本的に鏡子ちゃんもしのぶちゃんも信じてるから何とかかなるとは思うてたけどな」

主人の声も嬉しそうに響く。しのぶと鏡子は隅の席に並んで爛酒を呑んでいる。主人も今日は特別やと言つて先程からぐい呑みをちよいちよい傾けながら仕事をしていた。しのぶは銀縁メガネにポニーテールのままだが声は低めのソプラノで大人の女性の声を響かせているので常連達にはまだしつくり来ないようだ。おどおどした素振りが陰をひそめたせいとか、表情もしゃんとして年相応の面差しに見える。

不意にしのぶは猪口をカウンターに置くと居住まいを正して鏡子に頭を下げた。

「ごめんなさい。わたしやっぱり子供でした。自分のことばかり考えていたから、見えるはずのものが見えていませんでした」

「いいえ。いずれにしてもあの頃の貴方では白澤の事情を察するのは難しかったのではないかしら」

すっかり打ち解けた二人の会話に割って入るのは憚られると思つたのかユウヤンが恐る恐る切り出す。

「あもう、毎度のこととで申し訳ないんやけど、こっちはさっぱり何のことか

わからへんねん。解説してもらえんかなあ」

それを聞いて鏡子としのぶは仲の良い姉妹のように肩を摺り合わせながら笑った。

「あたし前から思うてたけど、しのぶちゃんって時々めっちゃいけずやな」
吉田のおばちゃんが拗ねたように言う。

「ごめんなさい」

しのぶはまだ楽しげに笑いながら詫びた。ここ数週間の屈託がすっかり解けたようで、常連達は内心胸を撫で下ろしていた。

「白澤グループの中核をなしているのは総合商社の白澤商事です。商事会社の仕事は外国との貿易ですよ。ですから当然白澤グループも、その総帥である祖父も多くの外国の方と付き合いです。そしてわたしが手紙を送った時期は十二月。もしわたしが味気ない茶封筒にでも手紙を入れて送っていたら却って目立って気付いてもらえたかもしれません。けれど、わたしが送った手紙の外観はよりによって冬をイメージさせるグリーンテイニングカード風のものばかりでした」

「あ、なるほどクリスマスカードですか」
センセが手を打った。しのぶが頷く。

「祖父は世界的に有名な企業の総帥です。経済界、政界の著名人と多く交流が

あります。わたし達が元旦に年賀状を送るように、キリスト教圏の方なら当然クリスマスシーズンにはカードを送ってこられますよね。そういったカードは業務用の手紙ではありませんからプライベートの方に仕分けられます。恐らくは何千通というクリスマスカードの中にわたしが送った手紙は紛れてしまっ
たんです」

「一つ貴方の推理を訂正しておきましょう」

猪口を傾けながら鏡子が言った。

「何千通ではなく何万通です。毎年、申し訳ないと思っ
ていますが、とても全部開封して読むわけにはいかず、差出人のリストだけ作らせているのです」

「では、今更ですが、その年のリストを調べればその何万人の中にしのぶさんの名前もあるのでしょ
うね」

センセが感慨深げに言った。それからセンセは立ち上がるとカウンターを回
り込んできてしのぶの前に立った。

「しのぶさんにお詫びをしなければなら
ないことがあるのです。しのぶさんのお父さんが亡くなる原因を作ったのは私なんです」

センセは深く腰を折った。

「どういうことでしょう」

「震災の年の一月、私の研究室でトラブルが起きて数学科から結城君に応援に

来てもらっていました。結城君はうちの研究室の仕事を手伝っていて罹災したのです。申し訳ないことをしてしまいました」

センセはなかなか頭を上げなかつたのでしのぶはあたふたとした。

「いえ、それはセンセのせいじゃありません。誰も地震が来るなんて思っていないませんでしたから」

センセは頭を上げるとポケットから手帳を出してそこに挟んであつた写真をカウンターに置いた。

「この写真どうされたんですか」

しのぶが目を瞠つた。そこには両親と赤ん坊のしのぶが写っていた。

「家内が白澤涼子さんと大学の同期なのです。同期生と連絡を取り合ったら、ご家族の写真を持っている方がいたので焼き増ししてもらいました。お持ち下さい」

「嬉しい。住んでいたアパートが燃えてしまったので子供の頃の写真が一枚もないんです。これ大事にします」

しのぶは立ち上がってセンセに頭を下げた。

「ああっ」

吉田のおばちゃんが本日三度めの大声を上げた。

「すっかり忘れとつた。見合いの話はどうなつたんですか？」

「そや、それが残った」

バリキも鶏の骨を皿に戻して顔を上げる。

「ああ」

鏡子はそんな話もありましたねと言わんばかりの気のない声を立てた。しのぶはなぜか怒ったような顔になりそっぽを向いた。

「十二月十六日は白澤商事の創立記念日で、午後にはごく限られた方達、けれど白澤にとって最重要の方達を内外から招いてパーティーを開きます。今年、しのぶは二十歳になったので白澤はそのパーティーに出席させてお披露目すると言いだしたので」

「実は……」

しのぶが鶏肉を皿に戻しておしぼりで手を拭きながら言った。

「十一月頃から、強引に白澤家に連れて行かれたことが何度かあったんです。仕事帰りに待ち伏せされて、屋敷に連れて行かれては写真を撮られたり、立ち居振る舞いを教え込まれたり」

素面のしのぶでは太刀打ちできずになすがままになっていた可能性が高い。「そう言えば、先月会った時、なんやいろいろあって疲れてるって言うてたな」『ちよつといろいろあって疲れてますけど、若いですから』笑いながらしのぶが言っていたのをバリキは思い出した。

「そのパーティーはプライベートな集まりですが、その場で公表される事はごくオフィシャルな発表になります。そのパーティーでしのぶのお披露目を行うという事は取りも直さず、この娘が白澤の後継者であると公言することになるのです。そうなればもう後戻りはできません。この娘の残りの人生は白澤のために捧げることになります。ゆくゆくは白澤が見込んだ男性をしのぶの婿に取るという話も持ち上がるでしょう」

鏡子はカウンターの上で硬く拳を握った。

「冗談じゃない。可愛い孫を私と同じ目に遭わせてたまるもんですか。私は必ずしのぶを守ってみせると心に誓いました。ということ、同じ日にしのぶに見合いをさせることにしたのです。そうすればパーティーを欠席する言い訳が立ちますから」

バリキが呑み掛けた焼酎をぶっと吹いた。

「ええと、お披露目とお見合いって、どっちも人生を決めてしまうような重大事やと思うんですけど」

吉田のおばちゃんが恐る恐る言った。

「あら、お見合いは後で理由をつけてお断りすれば済む話じゃないですか。別に結婚式を挙げると言っているわけではないのですよ」

鏡子は徳利の残りを猪口に注ぐと徳利を振ってお代わりを頼んだ。

「おい、四本目やなかったか？ということは、もう六合呑んだ勘定かい」
バリキがユウやんに囁く。

「というか八合はいくつもりみたいやな。しのぶちゃんも大概強いけどレベルがちやう」

とユウやんも囁き返した。

「そういえばバリキさん、貴方、どうしてお見合いの話をご存知だったの」
バリキは先日のバスケットボールの試合の話をした。

「貴方の目から見て柳沼さんはどんな方？」

「うーん。会社経営のことはさっぱりわかりませんが、バスケットに関しては小物ですわ。ラフプレーは一見ズルをして勝ちに行く手段のように見えるけど、実は仕掛ける側にメリットはほとんどないんです。つまらんミスが多発するし、仕掛けた方が大怪我することもある。何より相手チームとのコミュニケーションを最悪にします。商売でもあるんちゃいますか？商売相手の立場を無視して自分だけ儲けようとしたら却って商売が上手くいかんようになること。いずれにしても、試合の大局を見ることができる男には見えませんでした」

鏡子は満足そうに頷いた。

「それを聞いて安心しました。私の見立ては間違ってたようですよ」
「どういうことですか？」

「実はお披露目の噂を聞いて、既に気の早い方からお見合い話が何件か来ていたのです。人柄、経歴を調べさせて、その中で最も断り易い人物、言い換えると断っても白澤が納得するであろう最低の人物をピックアップしました。それが柳沼さんだったのです」

『ひっどお』、おばちゃんが率直な意見を漏らす。

「酷くはありません。酷いのはしのぶがどんな娘か知りもしないで結婚を申し込む彼らの方でしょう。あからさまな政略結婚じゃないですか」

いつの間にか見合いの話が、結婚を申し込む話や政略結婚を目論む話にすり変わっている。『別に結婚式を挙げるわけではないのよ』と言った舌の根も乾かないうちに——客達はそうツツコみたくてうずうずしたが、なんだか怖くて誰もツツコめなかった。

「昔、私は政略結婚に泣かされました。だったら今度は、政略結婚を孫娘を守る道具に使ってやると心に決めたのです」

「うわあ、なんやうちのおばあちゃん見てるみたいや」

吉田のおばちゃんが鏡子の耳に届かないよう小声でぼそつと言った。

「しかし、今回は凌げたとしても又別の機会にお披露目をする話は浮上するでしょう」

センセが心配そうに訊く。

「今回はあまりにも急だったので非常措置を打ったままでです。これから、時間をかけて白澤を説得します。それでも性懲りもなくお披露目をしようとするのなら別の手を打つまでです」

鏡子は事も無げに言った。

「あの方はとても失礼です」

いきなりしのぶがとんがった声を出した。

「どないしたんしのぶちゃん。そういえばさっきから怒ってるみたいやけど」
ユウやんが鶏肉を片手に訊く。

「お見合いの日。顔合わせをした後、柳沼さんと二人でホテルの庭を歩きました。男の方と二人きりでそんな風に歩くのは初めてだったので、わたしとても緊張していました。そしたら急にあの方、『ごめんなさい。僕は君を愛せない』って仰ったんです」

「そら又いきなりの告白やな。他に好きな娘でもおるんかな？やとしたら、それなりに誠実なところあるやん」

しのぶは、ユウやんを恨めしげに見遣った。

「いいえ。『僕が愛せるのは最低でもバスト85以上、できればDカップ以上なんです。80未満の女性はどうしても愛せないんです』と言われました」
しのぶはカウンターの上で硬く拳を握った。

「ということでも円満にお流れになりました」

鏡子がしれっと言う。いや円満ではないだろうと、しのぶを見ながら客達は思った。

「ま、まあ、世の中いろんな男がおるわ。けどその男も失礼なやつちやな。いくらしのぶちゃんかて80未満いうことはないやん」

しのぶが黙ったまま俯いて、気まずい沈黙が店を覆った。バリキがユウやんを無言で絞めにかかった。

烏賊ワタのルイベ、このわた、タチの味噌汁、真冬ならではの料理が続く。客達は舌鼓を打ちながらこの一年を振り返る。

「前から不思議やってんけど、しのぶちゃん、ようこの店見付けたな。駅からだいぶ離れてるし、住宅街の中にぽつんとあるから場所がわかってないとちよつと気付かんと思うんやけど」

バリキが素朴な疑問を口にする。

しのぶは何事か鏡子に耳打ちした。鏡子は『まあ』と驚いたような声を上げたが、笑って『構いませんよ』と頷いた。しのぶは真っ直ぐに主人を見詰めた。

「実は……、母に教わっていたんです」

「しのぶちゃんのお母さんは、うちに来られたことがあったんかな」

主人が尋ねる。記憶を辿るように首を傾げながら主人は自分のぐい呑みに生

酒を注ぎ足した。

「いいえ、来たことはないそうです。ただ、わたしがとことん困って一人でもうしようもなくなったらこのお店を訪ねなさいと言われました。年が明けた頃から、わたし薄気味の悪い男の人達に付きまといわれていて、何かされるわけではないから警察にも相談しづらくて困っていたんです。それである日、わたしここに来ました。お店の前で入りあぐねていたらバリキさん達が駆け寄ってきただのでつきりあの男達の仲間に襲われると思って……」

お店の中に飛び込みました——としのぶは言った。後にその男達は祖父がしのぶの身辺調査のために寄越していたのだと知った。しのぶは猪口の中身を一息に干して続けた。

「母は言いました。ここは、わたしの本当のお祖父さんがやっているお店だから、きつと力になってくれるって」

主人が盛大に生酒を吹いた。

「ちよっ、鏡子ちゃん」

むせ返りながら主人が訊く。思わず昔の呼び名が出た。

「ええ。涼子は駆け落ちしたあの夜にできた伸一さんと私の子供です。だからしのぶは伸一さんの孫ですよ」

鏡子はまるで今日の天気の話でもするような気軽さで答えた。

「ええと、旦那さんはその事知ってはるんですか？」

さしもの吉田のおばちゃんも恐る恐る訊く。

「もちろん。というか、白澤は元々子供が作れない体質なのです。少し理解しづらいかもしれませんが、白澤は恋愛感情や嫉妬心は生きていく上で邪魔になるだけの瑣末な感情と考えているようです。涼子のことにも正直に話したら。『そうか』と言って、自分の娘のように接してくれました」

「夫婦揃ってただもんやない」

ぼそつとおおばちゃんが呟くのを耳聴みみざとく聞いて、バリキは内心おばちゃんがそれを言うかと思った。

「そろそろ、おいとましましょうか」

鏡子は立ち上がり、しのぶを促した。結局鏡子は一升空けてバリキとユウやんを驚嘆させた。しのぶも頷いて立ち上がる。

「あの、先に行つて頂けますか？すぐに追いかけます」

察して鏡子は頷くと『ごちそうさま』と言って格子戸を潜った。

「あの、わたし皆さんにお礼が言いたかったんです」

背筋をしゃんと伸ばしたしのぶは銀縁メガネとポニーテールをしていても、もう中学生には見えなかった。

「初めてわたしがこの店に来た時のことを覚えていらっしやいますか？五十円玉二十枚の謎をセンスが話された日のことです」

男達が頷いた。

「あの日、わたしは時間を気にして慌てて帰ろうとしましたよね。あれは用事があるフリをしていたんです」

「フリ？」

「はい。家に帰っても用事なんて何もありませんでした。でも、あれ以上ここにいたら泣いてしまいそうだったから。……わたし、お店を出てから少し泣きました」

男達は黙って聞いている。

「誕生日おめでとう」

しのぶは小さな声で呟いた。

「嬉しかった。そんなこと言われたの母が亡くなってから初めてだったんです。今、出会ったばかりの見ず知らずの人達に『おめでとう』って言ってもらって、誕生日にとご馳走して頂いて。世の中にこんなに温かい場所があるなんて……。それで、わたし、居酒屋が……。この酔鏡がいっぺんに好きになりました。この一年間、わたしとても幸せでした。このお店で過ごした時間をずっとずっとわたしの宝物にします」

几帳面なお辞儀をしてしのぶは格子戸を開けた。いつの間に降り出したのか舞い始めた粉雪が彼女のコートをかざらげてひんやりとした十二月の夜気を店の中に運ぶ。

「ちよつと待ち、何しんみりしてるん」

吉田のおぼちゃんが慌てて呼び止める。

「年が明けたら今よりもっと忙しくなります。だからここにはもう来れないと思っうんです」

客達に背中を向けたままそう言ってしのぶは格子戸を潜った。誰もが何か言おうとしたが、誰も何を言っって良いのかわからなかった。

「良いお年をお迎え下さい」

戸の向こうでしのぶはもう一度お辞儀をすると静かに戸を引いた。主人と客達はいつまでも黙っってその黒々とした格子戸を見詰めていた。

（最終夜 了）

エピソード

毎年の事だが年が明けてふと気が付くと一月も半ば頃になっている。センセはそんなことを考えながら朝刊をめくっていた。

「あ、敬一君。葉書が来てたよ。テーブルの上にあるでしょ」
キッチンから顔だけ出して千秋さんが言った。何の変哲もない官製はがきがテーブルの隅に載っていた。宛名は吉岡敬一様、差出人は平井伸一となっていた。記憶にない名前だ。葉書を裏返してセンセは『ああ』と思わず声を立てた。

今宵、酔鏡にて

来る一月二十日午後五時より

当店の創業四十周年を兼ねた

ささやかな祝賀会を開催いたします。

会費四千元 食べ放題飲み放題

特別料理もご用意し

皆様のご来店

心よりお待ちしております。

達筆な手で書かれた案内文をセンセは何度も読み返した。常連達のところにも同じ葉書が送られたことだろう。手帳に予定を書き入れながら、あの娘はやはり来ないのだろうかとセンセは考えていた。

一月二十日 日曜日

センセは千秋さんを伴って酔鏡を訪れた。格子戸をからりと引くと、店内の喧騒が路地にまで溢れだしてくる。

「何事ですかこれは」

おっかなびっくり格子戸を潜ると店の中はセンセがかつて見たことがない程の賑わいを見せていた。

「へえ、ここが敬一君の行きつけなんだ」

もの珍しげに店の中を見回しながら千秋さんが続く。

「お、噂のお嬢さんも一緒なんや。お姉さんの方？それとも妹さん？」

バリキが大きな声を出す。

「何を言っているのですか。この人は私の家内です」

途端に客達がどよめき、口々に『犯罪だ』『職権濫用』『世の中間違ってる』と騒ぐ。やかましいことこの上ない。

「奥が二つ空いているで」

主人がカウンターの向こうで顔を上げる。千秋さんを見て軽く会釈すると、千秋さんはきちんとお辞儀をして『主人がいつもお世話になっております』と挨拶をした。『おおっ』と客達が再びどよめく。

「センセ今晚は。奥さんは初めまして」

L字カウンターの短い辺の側に腰を下ろした派手な服装のおばちゃんが手を振った。隣にはやくざの幹部かと見紛う男が座っている。

「吉田さんご夫妻です。ご主人は山通運輸の専務、奥様は好み焼き屋を営んでおられます」

センセが紹介する。千秋さんと吉田夫妻は挨拶を交わした。

「それから、ユウヤン。自称競馬の神様」

L字の角に座っているパンチパーマの男がぺこりと頭を下げた。

「お金に困ったら言うて下さい。確実に儲かる馬を教えたげます」

『決して耳を貸さないように』とセンセは千秋さんに耳打ちして客達の後ろを進む。

「おや、珍しい方がいらつしやいますね。千秋さん、こちら山下さん。童話を書かれています。隣は寺田さん、絵本の挿絵画家をなさってます。あ、家内です。わざわざ東京からですか？」

センセが尋ねると山下は笑いながら顔の前で手を振った。

「実はようやく本ができましたね。来月発売です。打ち合わせを兼ねて寺田君を訪ねたところこちらからお誘いを受けているという。で、折角なので厚かましくお邪魔しました」

軽く会釈をして二人は更に奥に進んだ。

「あ、センス。明けましておめでとうございます。奥さん初めました」

東大寺南大門の金剛力士像と見紛う大男が首を捻って挨拶をした。男の隣の青年がどうしても小柄に見えてしまう。

「スポーツ万能選手のバリキ君と隣は弟の学君。京大の二回生で専門はバイオです」

「初めまして、主人がお世話になってます」

千秋さんが挨拶するとバリキも会釈しながら『センスには勿体ないで、ほんま世の中間違うとる』とぼやいた。

ようやく二人は端の空席に辿り着き腰を下ろした。

「ええと」

主人が店の中を見渡す。

「お一人遅れはるそうやけど、始めさせてもらおか」

吉田夫妻の横に一席空席があった。それを聞いた客達がざわめく。と、ユウヤんが手を挙げた。

「あ、ちよつと、期待させてすまん。あと一人は、わしの連れで佐山君や」

佐山君は劇団の主催者で去年の九月にこの店で起きたドタバタ劇の立役者である。

「最初に一言挨拶させて下さい」

主人が居住まいを正した。

「ええ、お蔭様でこの店も今年で四十年を迎えました。これもひとえにこの店を支えてくれた多くのお客様の愛情の賜物やと思います。この店の中にはここに通うてくれた人の想いが四十年分ぎっしり詰まっています。これからもその想いを大切にして、精進して参りますのでどうぞよろしくお願いします」

拍手が沸き上がり、店が回り始めた。壁のホワイトボードにはこう書かれている。

お品書き

謹賀新年 子年

「まさか、ネズミ料理が出てくるんちゃうやろな」

ユウやんが恐ろしいことを言う。

「あのなあ。子年に引っ掛けてお正月料理と根菜の料理いろいろ出させてもらいます言うこっちゃ」

主人が解説する。

客達は何度も店の格子戸を見遣った。今しもその木戸がからりと開いて、『こ

んばんは』とどこか頼りない声を上げながらポニーテールの娘が入って来はしないかと期待した。

しのぶは、あのクリスマススイヴの夜以来ふつりと姿を見せなくなってしまう。センセが数学科に確認すると年明け以来職場も休暇を取って休んでいるという。

「ほな、そろそろ特別料理を出さしてもらおかな」

主人の声に客達が拍手を送る。

「中華の四川料理でおめでたい席では定番やねんて。豚ロースの甘酢炒めや」解説をするだけで動こうとしない主人を客達は怪訝そうに眺めた。

「良えよ。持ってきて」

主人が奥に声を掛ける。暖簾を分けて——ポニーテールに銀縁メガネのしのぶが盆を捧げ持って現れた。赤いギンガムチェックのエプロンをしている。

客達は一瞬何が起きたのか分からず、店の中はしんとした。が、次の瞬間窓ガラスを割らんばかりのどよめきが沸き起こった。

「こんばんは」

客達の興奮が少し収まるのを待って、しのぶはおどおどした声で挨拶をした。

「あれ？しのぶちゃん元に戻ってへん？」

バリキが訊くとしのぶは小首を傾げながら答えた。

「クセになっちゃってるみたいで、ここに来た次の日にはもう元に戻ってしま
って……。お祖母ちゃんがっかりしてました」

「で、何してるの？」

「あの……。店員なのですけど」

自信なさそうにしのぶが言う。

「ま、ええやん。しのぶちゃん一杯呑みや」

吉田のおばちゃんが大きな声で言う。千秋さんがセンチの袖を引いて『勢い
でも中学生に呑ませたらまずいよ』と囁いた。『いえ、彼女はとつくに二十歳
を過ぎています』とセンチが囁き返す。

ひとわたりグラスが満たされ、しのぶも生酒のぐい呑みを握った。

「あの……。一つお願いがあるのですけど」

消え入りそうな声でしのぶが言う。

「みなさんで『おめでとう』って言ってもらえませんか」

客達はちよつと首を傾げたが、まあ四十周年やし、などと言いついてバリキ
の『せえの』という音頭で、

「おめでとう」

と声を揃えた。

「ありがとう」

しのぶは嬉しそうにそう言ってグラスを干した。

「ああっ」

ユウやんが大きな声を上げる。

「しのぶちゃん二十一歳になったんや」

しのぶはにっこり笑って頷いた。

「はい。三日前になったんですわ」

甲高い返事が帰ってくる。

「ほんまは三日前に祝賀会しよって、お祖父ちゃんは言うてたんですけど」

「お祖父ちゃん言わんといて。年寄り臭い」

言いながら主人が照れて真っ赤になる。

「センター試験は今日までやから、今晚にしよいう話になったんです」

「センター試験ってしのぶちゃん大学受けるんか？」

「はい。前から準備進めてたんです。十二月頃は大変でした。寝不足でふらふらしてて。周りの人にもずい分助けてもらたし。特に、数学は出遅れてたから職場の工藤先生に遅くまで分からんとこ教えてもらったり参考書買うのに三宮まで付き合ってもらったり」

「ああっ、不倫疑惑」

吉田のおばちゃんが記憶を呼び覚まされて大きな声を出す。

「ええっ、あたし工藤先生と不倫してたんですか？いやや、マディソン郡の橋とか金妻みたいに」

「それ、どっちも人妻の話やし」

「けど、大将も人が悪いな。しのぶちゃん来てるんやったら一言言うてくれたら良えのに」

ユウヤんがぼやく。

「案内状に書いたやん。開店四十周年を兼ねた祝賀会って、何と兼ねてるかいうたら、そら孫の誕生パーティに決まっとる」

顔が雪崩を起こしそうな主人を見て客達は『アホらし』と溜息をついた。

「じゃあ、年が明けたら忙しくなるから来れないというのは受験の話だったんですね」

センセが尋ねる。

「はい。今は職場も休暇頂いてます」

しのぶはしれつと言う。

「お願いですから、今度からそういう話をしんみり言わないで下さい」

言ってセンセは溜息をついた。

「受験が終わったらまた来ます。というかここで週三回アルバイトをさせてもらうことになりました。今日は研修なんです。あ、その特別料理はあたしが作

ったんですよ。そこが特別なんですわ」

言ってるのぶは笑った。

「バリキ、実験してみたいと思わへんか？」

ユウヤンが席の後ろから声を掛ける。

「俺も同じこと考えとった。……あつ、UFO」

「えっ、どこどこどこ？」

ノリ良くカウンターからしのぶが身を乗り出すとバリキは銀縁メガネを外し、ポニーテールを解いた。

長い髪を胸まで垂らし、奥二重のつぶらな瞳を瞬かせて二十一歳になった娘はしやんと背筋を伸ばした。料理を口に持って行きかけた千秋さんが呆気に取られてストップモーションになってしまった。

からり

格子戸が開いて痩せ身の男が入ってきた。

「お、佐山君いらっしやい。ごめん、おばちゃん一個詰めて」

ユウヤンが声を上げる。

それでも佐山君はちよつと居づらそうに入口の傍に立っていた。

「ほんまに僕なんかお邪魔して良かったんですか？常連でもないのに……」
それを聞いたしのぶがすつと寄ってくる。

「大丈夫ですよ。初めての方でも気安く入れるくらい敷居が低いのが当店の売りです」

そう言って丁寧にお辞儀をした。

「ようこそ酔鏡へ」

(完)